

発話行為条件文 (speech-act conditionals) とメタ表示

中 島 信 夫

0. はじめに

自然言語の条件文では、一般に、条件節と帰結節との間には何らかの‘自然な’関係が見られる。例えば、次の条件文では条件節と帰結節の間には一種の因果関係が認められる。

(1) If you work hard, you will pass your exams.
ところが、次のような例では、少なくとも見かけ上はそうした自然な関係が認められない。

(2) Al: ... What do you charge for a visit?
Willie: A dollar.
Al: A dollar? That's very cheap for an examination.
Willie: It's not an examination It's just a visit.
"Hello and Goodbye" ... "Hello and How Are You?" is ten dollars.
Al: If you ask me, you're a quack.
Willie: If I was a duck I would ask you ... Now roll up your sleeve, I wanna take some blood.

(N. Simon *The Sunshine Boys*)

こうした (2) のような条件文を、Geis and Lycan (2001) は ‘nonconditional conditionals’ と呼び、その特徴を細かく調べた。また、Sweetser (1990) は、こうした条件文では、条件節は帰結節の発話行為を遂行する十分条件を表していると言主張し、発話行為条件文 (speech-act conditionals) と呼んだ。一方、Noh (2000) は、メタ表示 (metarepresentation) という考え方をを用いて分析し、メタ表示という表示のレベルで見ると、こうした条件文はいずれも実質含意 (material implication) を表す条件文であると主張した。

本稿では、こうした条件文を3つの種類に分類整理し、Noh のいうメタ表示がどのようなものであるかを詳しく考察する。その考察の基本は、条件文におけるメタ表示というのはいわゆる引用 (quotation) の言葉遣いと連続しており、その延長上にあるとする考えである。

1. 3つの種類

まず考察の対象とする条件文を、Sweetser の用語を借りて、発話行為条件文と呼ぶことにする。これはこうした条件文におけるメタ表示がいずれも発話行為を表すものであるからである。そして、分類の1つの基準として、Declerck and Reed (2001) による開条件節 (open-P clause) と閉条件節 (closed-P clause) の区別を用いる。開条件節は、日本語の「ば」、「たら」、「と」などを用いた条件文の条件節に対応し、閉条件節は、「ナラ」を用いた条件節に対応する。さらに、もう1つの基準として、Van der Auwera (1986) の分析に見られるような発話行為とその発話の力の掛かり方を用いる。この2つの基準によると、発話行為条件文は以下の (i), (ii), (iii) の3つに分類できる (それぞれ (a) の例は、(b) のようなメタ表示になっていると考えられる)。

- (i) 条件節が開 (open-P) で、帰結節が発話行為のタイプ:
- (3) a. Oh, waiter. I'll be expecting some people. If anybody asks for me, I will be right here.
b. If anybody asks for me, I ask [you to say that I will be right here]
- (4) a. [The door bell is ringing. Jane knows that Mary does not want to see John]
Jane to Mary: If that's John, are you not here?
(Noh (2000: 204))
b. If that's John, do you ask [me to tell him that you are not here]?
- (5) a. Mitch recrossed his legs. Money, that was the big question, particularly how it compared to his other offers. If it isn't enough, thought Mitch, then it was nice to meet you fellas. If the pay is attractive, then we can discuss families and marriages and football and churches.

(J. Grisham *The Firm*)

b. If it isn't enough, then [I will say that it was nice to meet you fellas].

- (6) a. He [= My father] could be almost invisible as a human being, but I still had to be smaller. So if I got good grades in school, then I was a pussy for not playing football. Or if I cut my hair for him, it was never short enough. If I shaved my head, then I looked like a psycho. I never won the game. Never. And if he couldn't make me smaller with words, ... (*Life as a House*)

b. If I got good grades in school, then [he said that I was a pussy for not playing football].

(3a), (4a), (5a), (6a) は、いずれも条件節は開条件節で、帰結節はそれぞれ (3b), (4b), (5b), (6a) の [] 内のようなメタ表示を持っている。発話の力は、(3a) は行為指示型 (!), (4a) は質問型 (?), (5a), (6a) は主張型 (⊢) で、その発話の力の掛かり具合はそれぞれ次のようになると考えられる。

- (7) a. ! (P → you say Q)
 b. ? (P → I say Q)
 c. ⊢ (P → I will say Q)
 c. ⊢ (P → he said Q)

例えば、(7a) は、(3b) における発話の力 (I ask) の掛かり方は、(8a) であって (8b) ではないことを示している。

- (8) a. I ask [you to say that I will be right here if anybody asks for me].
 b. If anybody asks for me, [I ask [you to say that I will be right here]].

(ii) 条件節が開 (open-P) で、帰結節では発話行為が実行されているもの¹⁾ :

- (9) a. If I may say so, that's a crazy idea.
 b. If I may say so, I say [that's a crazy idea].
 (10) a. If it's not rude to ask, what made you decide to leave IBM?
 b. If it's not rude to ask, I ask [what made you decide to leave IBM].
 (11) a. If I haven't already asked you to do so, please sign the guest book before you go.
 b. If I haven't already asked you to do so, I ask [you to sign the guest book before you go.

(9a), (10a), (11a) の条件節は、いずれも開条件節で、帰結節はそれ自身の発話の力を持つ。条件文全体に主

張の発話の力が掛かっていると考えられるので、発話の力は、次に示すように帰結節に掛かる力と条件文全体に掛かる力の2つがある²⁾。

- (12) a. ⊢ (P → ⊢Q)
 b. ⊢ (P → ?Q)
 c. ⊢ (P → !Q)

このような発話の力の掛かり方は、次の帰結節が遂行文 (performative sentence) になっている条件文にも見られる (Declerck and Reed (2001: 371) の例)。

- (13) a. If she takes part in the race, I bet she comes in last.
 b. If my niece comes to the party I {ask/beg/warn} you to stay away from her.

ただし、(13) の例では、条件節の条件が満たされて初めて帰結節の発話の力は効力を発揮するが、後で述べるように、(9a), (10a), (11a) の帰結節の発話行為は、通常、条件文発話と同時に遂行されており、従って、発話の効力も発揮されている。

(iii) 条件節が閉 (closed-P) で、帰結節では発話行為が実行されているもの :

- (14) a. Deborah Kerr: If you're looking for the captain, he isn't here. (*From Here To Eternity*)
 b. If it is true [you're looking for the captain], I tell you [he isn't here].
 (15) a. If you're so smart (as you seem to think), what was the date of Charlemagne's coronation?
 Noh (2000: 181)
 b. If it is true [you're so smart], I ask you [what was the date of Charlemagne's coronation].
 (16) a. If you've finished your homework, go out and play. Tedeschi (1974: 141)
 b. If it is true [you've finished your homework], I allow [you to go out and play].

これら (14a), (15a), (16a) の条件文は、条件節が閉で他者の発言とか思考をエコーし、命題内容が真であると想定 (assume) されている (Declerck and Reed (2001, 4.2.4)。帰結節は、(ii) 類の条件文と同じく、発話行為が遂行されており、それ自身の発話の力を持つ。従って、条件節と帰結節の両方が発話の力を持ち、その掛かり具合は次のようになる。

- (17) a. ⊢ (⊢P → ⊢Q)
 b. ⊢ (⊢P → ?Q)
 c. ⊢ (⊢P → !Q)

(14), (15), (16) では、P の内容は Q の発話行為を遂

行する条件ないしは理由のような関係にあるが、次の例では、Pの発言とQの発言を単に対比させている(イタリックは筆者)。

- (18) Men's interest in the details of politics, news, and sports is parallel to women's interest in the details of personal life. *If women are afraid of being left out by not knowing what is going on with this person or that, men are afraid of being left out by not knowing what is going on in the world.*

D. Tannen *You Just Don't Understand* つまり、次のように他者の発言と話者の発言とを並べて対比させている。

- (19) If you say [women are afraid of ...], I say [men are afraid of ...].

以下の節で、発話行為条件文におけるメタ表示がどのような仕組みになっているか、詳しく考察する。

2. トークンとそのタイプ—引用の仕組み—

一般に、目の前にある腕時計を指さして(20)のように言うとき、50ドルで売られていたのは指さされた時計そのものである。

- (20) This once sold for \$50.

しかし、Numberg (1978: 23) の言うように、「この種類の時計は」という意味で、時計の種類、つまり、タイプのことを指す解釈もできる。このように直接指した対象ではなくその「先」にある別のものを指示することを、Quine (1969) は「延長指示 (deferred ostension)」と呼んだ。延長指示される対象には種々のものがあるが、ここではトークンに対応する意味でのタイプについて考える。例えば、靴を指さしながら次の文を発話する場合、指示対象は、一義的に指さされた靴をトークンとするタイプである

- (21) Those are no longer in fashion.

Recanati (2010: 221)

こうした延長指示は、次のような引用表現においても見られる。

- (22) a. 'Alice swooned' is a sentence.
b. The expression of which this is a token is a sentence.

↓

Alice swooned.

Davidson (1979) によると、(22a) は (22b) のように、引用句では引用符“ ”が指示表現の働きをして、トークンとしての(物理的事象の)「発音」を指し示すことによりその延長にあるタイプとしての「文」を指示

することになる。ただ、言語表現のトークンは、(20)の例における時計のように指し示す行為と独立して存在しているのではなく、指し示す行為によってその指し示されるトークンが存在するという点で一般の指示行為とは異なっている³⁾。

そこで Recanati は、Clark and Gerrig (1990), Clark (1996) にならって、言語表現の場合は、指示行為をもってトークンを生成しているのではなく、トークンの例示 (demonstrate or illustrate by exemplification) をしていると考える。例えば、次の例で、Rick は Ilsa の発話の特に声を真似ている。つまり、Ilsa の声の特徴を再現して、「このような特徴を持った発話だった」と実例で Ilsa の発話を示している。

- (23) Rick, to Ilsa: It's funny about your voice, how it hasn't changed. I can still hear it? Rick dear, I'll go with you anyplace. We'll get on a rain together and we'll never stop.' (Casablanca)

この場合、Ilsa の発話とその発話を再現した Rick の発話は声のある特徴を共有しているが、これは、両者がそれぞれその声の特徴を備えた発話タイプUのトークンになっているということである⁴⁾。

Type U

↗ ↖
Rick's u Ilsa's u'

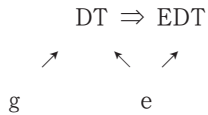
言い換えると、Rick は発話 u によって発話タイプ U を例示 (demonstrate) し、U を介して Ilsa の発話 u' に言及していると言える。ここでは、Ilsa の発話 u' が Rick の例示行為の目標 (target) となっているが、例示されたタイプが目標となる場合もある。

Recanati (2010: 224-6) は、次の Clark (1996) の例をもとに行為のタイプが目標となる場合を説明している。

Suppose George tells Helen, "Elizabeth drinks tea like this." He holds an imaginary saucer in his left hand. Then, with his right hand, pinkie up, he picks an imaginary cup off the saucer, lifts it to his lips, tips it, purses his lips with eyes half closed, and pretends to drink. Then he returns his hands, relaxed, to his lap. With these actions, George demonstrates to Helen how Elizabeth drinks tea. He means that Elizabeth drinks tea in such and such a way, and that makes his action a signal. Clark (1966: 172-3)

Recanati の説明に沿って見てみると、まず George は、Elizabeth の仕草を真似ることによってお茶を飲む仕

草のタイプ DT を例示する。この DT は仕草一般を示すもので特に誰の仕草ということではないから、Elizabeth はこのタイプには含まれていない。しかし、George が目標とするのは Elizabeth のお茶の飲み方であるから、目標は Elizabeth を含むタイプ EDT となる⁵⁾。



Elizabeth のお茶を飲む仕草 e は、EDT のトークンであると同時に DT のトークンでもあるが、George の仕草 g は DT のトークンではあっても、EDT のトークンではない。

このような例示の目標がタイプとなる例は発話行為においても見られる。次の例では、宣誓式の場面で、大佐が宣誓の見本を示し、クラス全員がそれにならって宣誓行為を行っている。

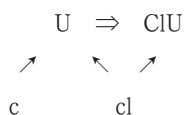
(24) Captain: Class Fifteen Eighty-One, raise your right hand and repeat after me. I do solemnly swear ...

Class: I do solemnly swear ...

Captain: ... that I will support and defend the Constitution of the United States of America ...

Class: ... that I will support and defend the Constitution of the United States of America ... (*An Officer and a Gentleman*)

ここで、大佐は、自分の発言行為 (c) により宣誓行為のタイプを例示しているが、目標とするのは、クラスのメンバーが宣誓する仕方、つまり、タイプ (CIU) である。この場合のタイプとトークンの関係は、お茶の飲み方の例と同じで、次のように表すことができる (cl はクラスのメンバーの発話、U は大佐の発話とメンバーの発話をトークンとするタイプ)。



引用におけるこのような発話のトークンでもって発話のタイプを例示する仕組みが条件文という構文の中においても見られるというのが本稿の考え方である。

3. 条件文におけるメタ表示の仕組み

3.1 条件節が開 (open-P) で、帰結節が発話行為のタイプの場合

2節の考え方をもとに、まず、(i) の種類の発話行為条件文 (25) の分析を行ってみたい。

(25) a. If anybody asks for me, I will be right here. = (3a)

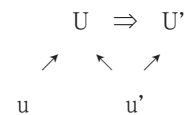
b. *Jane to Mary*: If that's John, are you not here? = (4a)

c. If it isn't enough, then it was nice to meet you fellas. = (5a)

d. If I got good grades in school, then I was a pussy for not playing football. = (6a)

これらの例における帰結節の発話では、いずれも前節で見た Elizabeth のお茶の飲み方や宣誓文の発話の例におけるトークンとタイプの関係と同種の見られる。

まず、(25a) では、話し手の発話 u は発話タイプ U を例示し、U を介してその下位タイプ U' が指示され、U' には聞き手が含まれている。



(26) a. u=I say that I will be right here.

b. U=[x says that I will be right here]

d. U'=[You say that I will be right here]

e. !(If anybody asks for me, [you say that I will be right here]).

この場合、発話の力 I ask (!) は、条件文の発話全体に掛かると考えられるので u の中には含まれない。u' は、依頼が受け入れられたときに現実化する聞き手の発話行為になる。そして、条件文の主節にはタイプ U ではなく U' が入る。

次の (26b) では、u, U, U' はそれぞれ次のようになる。

(27) a. u=I tell him that you are not here.

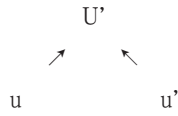
b. U=[x tells y that you are not here]

c. U'=[I tell him that you are not here]

e. ?(If that's John, [I tell him that you are not here]).

発話の力 Do you ask (?) は、条件文全体に掛かるので u からは除かれる。また、この場合は、u はタイプ

U'でもあるので、上位のタイプUは省いて、タイプU'を介してuとu'がつながると考えることができる。



(26c)におけるu, U, U'は次のようになる。

- (28) a. u=I say that it was nice to meet you fellas.
 b. U=[x says that it was nice to meet you fella]
 c. U'=[I say that it was nice to meet you fellas]
 e. † (If it isn't enough, [I will say that it was nice to meet you fellas]).

発話の力は主張の力(†)で条件文全体に掛かる。uはタイプU'でもあるので(26b)と同じくトークンとタイプの関係は簡略化できる。

最後の(26d)では、u, U, U', u'はそれぞれ次のようになる。

- (29) a. u=I say that I was a pussy for not playing football.
 b. U=[x says that I was a pussy for not playing football]
 c. U'=[My father says that I was a pussy for not playing football]
 d. u'=My father said that I was a pussy for not playing football.
 e. † (If I got good grades in school, then [he said that I was a pussy for not playing football]).

u'は過去においてすでに存在した発話という点で他の例と異なる。

これらの例から分かるように、(i)の種類の場合では、帰結節は(22)の単語の引用例と同じく、トークンを示すことによりタイプを指示する構造をしていると考えられる。つまり、(22)では、引用符の中にはトークンがありそのトークンのタイプが指示され、そのタイプについて記述が行われている。

- (30) [liberty]
 ↑
 "Liberty" is a noun. = (22)

これと同様に、条件文では、主節に発話のトークンがあり、そのタイプが条件節とつながっている。

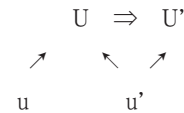
- (31) Q
 ↑
 If P, then "q."

3.2 条件節が開で、帰結節では発話行為が実行されている場合

次は、(ii)の種類の場合の発話行為条件文であるが、この条件文の条件節では発話行為遂行の適切でないし礼儀作法の条件が述べられている。そして、帰結節は、条件節との繋がりからして、発話行為のタイプを例示するメタ表示と考えら、そのメタ表示には発話の力も含まれる。

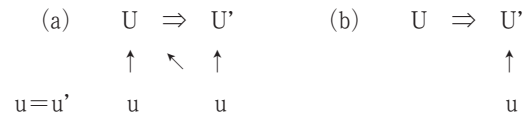
- (32) a. If I may say so, that's a crazy idea. = ((a)
 b. If it's not rude to ask, what made you decide to leave IBM? = (9a)
 c. If I haven't already asked you to do so, please sign the guest book before you go. = (10a)

これらの条件文における帰結節のメタ表示が、どのような仕組みになっているかを、(i)の種類の場合にならって、一般的なパターンに当てはめて考えてみたい。まず、(32a)の帰結節の発話におけるu, U, U', u'は(33)のように考えられる。

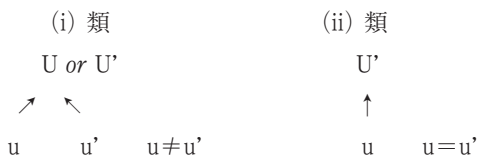


- (33) a. u=I say [that's a crazy idea]
 b. U=[x says [that's a crazy idea]]
 c. U'=[I say [that's a crazy idea]]
 d. u'=I say [that's a crazy idea]

一般には、タイプU'は必ずしもトークンuのタイプではないが、(i)の種類の場合(25b), (25c)と同じく、ここではuのタイプでもある。そして、u'はuとは、(i)の種類では別の発話であるが、ここでは同じものである(u=u')。従って、(a)の関係は、(b)のように表記できる。



この点は、(i)の種類と(ii)の種類の重要な違いなので、2つの場合を次に図示する。



つまり、(ii)類の帰結節の発話uは、他の発話に言及するのではなく、自身の発話タイプU'を示すのが主

たる目的である。そして、この場合、帰結節の内容を主張する話し手自身の発話行為は、例示すると同時に、見せかけのものではなく、実際に遂行されている。また、(i) の種類では、タイプ U' に取り込まれるのは発話行為 (locutionary act) であるのに対し、(ii) の種類では、発話内行為 (illocutionary act) が、つまり、発話の力も、タイプ U' の中に取り込まれていると考えられる。従って、条件文全体の発話は次のようになる⁶⁾。

(34) ⊢ (If I may say so, [⊢I say [that's a crazy idea]])
これはすでに見た帰結節が遂行文の条件文と同じ形をしている⁷⁾。

(35) If my niece comes to the party I {ask/beg/warn} you to stay away from her. = (13b)

このような条件文の発話では、発話時においては帰結節の発話行為は遂行されず、条件節が真であるような状況で初めて遂行されることになる。しかし、(34) の形の条件文では、条件節の真偽にかかわらず、“I say ...” という発話行為の性質から帰結節の発話行為は遂行されてしまう。

(36) If I may say so, I say that's a crazy idea.

ただ、(ii) 類の条件文では、帰結節の発話行為は実質的には遂行されているが、全体の条件文の発話は、条件節が真の状況で初めて遂行されるという一種の偽装を行っていると言える。

これらのことを考え合わせると、(32a) の条件文全体の発話では、2つの発話行為 u, u' が並行して遂行されていると考えられる。

(37) u''=⊢ (If I may say so,
[⊢I say [that's a crazy idea]])
↑

u=⊢I say [that's a crazy idea].
u は、“That's a crazy idea.” という発話行為を遂行すると同時に、その発話行為のタイプを帰結節として条件文に供給している。そして、u' は、その発話行為は発言の許可が得られて初めて効力を持つという「偽装」を行っている。

(32b), (32c) においても、帰結節の発話の力が異なるだけで同様に考えることができる。

(38) u''=⊢ (If it's not rude to ask,
[?I ask [what made you decide to leave IBM]])
↑

u=I ask [what made you decide to leave IBM]
次の (39) で、u'' は (32c) に対応する帰結節が遂行文になっている (40) のような条件文である。

(39) u''=⊢ (If I haven't already asked you to do so,
[!I ask [you to sign the guest book before you go]])
↑

u=I ask [you to sign the guest book before you go].
(40) If I haven't already asked you to do so, I ask you to sign the guest book before you go.

この条件文の発話では、聞き手がまだ記入していない場合、条件節の真偽にかかわらず、帰結節の発話行為は遂行される。真の場合は、遂行の条件が満たされることにより、偽の場合は「すでに記入することを頼んでいる」ということを気づかせることにより帰結節の遂行文は効力を持つ。

2つの発話行為が同時並行で遂行されているという点で、(ii) の種類の条件文は、いわゆる「発話行為修飾副詞」を持つ次のような文と似ている⁸⁾。

(41) a. Confidentially, she is very stupid.
b. Since you must know, Cynthia is my daughter.
(The Moon is Blue)

これらの文の発話においても、次のように2つの発話行為が並行していると考えられる⁹⁾。

(42) a. ⊢ ([I tell you confidentially that she is very stupid])
↑

I tell you that she is very stupid.

b. ⊢ ([Since you must know, I say that Cynthia is my daughter])

↑

I say that Cynthia is my daughter.

以上で見たように、(ii) 類の条件文の場合、帰結節の発話は、単にタイプを例示するのではなく、発話行為が実際に遂行されている。このような発話の働きは、条件文にだけ見られるものではなく、より一般的な言葉遣いである。このことをいくつかの例で確認しておく。

まず、Noh (2000: 57) のあげる次の例では、B は A の発話を引用すると同時に、その主張を是認 (endorse) している。

(43) A: The World Cup makes people mad.

B: The World Cup makes people mad, indeed.

すなわち、引用ということで、B の発話は発話のタイプを例示しており、同時に B は発話内容に対する自身の信念を表明している。また、次の例でも、王子による蛇の言葉の繰り返しは、タイプを介して蛇の言葉に言及することであり、同時にその言葉の内容を確認している。

- (44) And he went back to meet the fox.
‘Good-bye,’ he said.
‘Good-bye,’ said the fox. ‘And now here is my secret, a very simple secret: It is only with the heart that one can see rightly; what is essential is invisible to the eye.’
‘What is essential is invisible to the eye,’ the little prince repeated, so that he would be sure to remember.

A. de Saint-Exupéry *The Little Prince* Tr. by K. Woods

さらに、ことわざとか聖書を引用する場合も、タイプの例示だけでなく、その内容に対し、話し手は自身の心的態度を表明している。

- (45) Jack elbowed Bill, and Bill punched him on the nose. He should have turned the other cheek (as it says in the Bible). Maybe that would have been the best thing to do.

Sperber and Wilson (1981: 307)

3.3 条件節が閉 (closed-P) で、帰結節では発話行為が実行されている場合

(iii) 類は、次のように、閉条件節の条件文である。

- (46) a. Deborah Kerr: If you're looking for the captain, he isn't here. = (13a)

b. If you're so smart (as you seem to think), what was the date of Charlemagne's coronation? = (14a)

c. If you've finished your homework, go out and play. = (15a)

閉条件節は、他者の発話ないし思考をエコーすると言われているが、単にエコーしているだけでなく、条件節と帰結節とが対話のペアを形成している。

- (47) a. Burt: I'm looking for the captain.
Debora: He's not here.
b. A: I'm smart.
B: What was the date of Charlemagne's coronation?
c. A: I've finished my homework.
B: Go out and play.

対話のペアということは、つまり、この種の条件文では、条件節と帰結節の内容の関係ではなく、内容を含めた発話 (行為) の間の関係が成立していることである。

こうした対話の関係を他の例で確認しておく。

- (48) *Elderly Man*: You can't talk to my wife like that. Who do you think you are?

Countess: I'm a genuine Countess with a lot of dough, and *if that's your wife, she's a tub of guts*.

(*The Purple Rose of Cairo*)

ここでは相手の発言を ‘That's your wife.’ という発話でまとめて、それに対し答えていると考えられる。

- (49) *Elderly Man*: This is my wife.

Countess: She's a tub of guts.

次は、聴衆の思考を想定して、それに対する発言と考えられる。

- (50) *The speaker, named Congressman Billings, speaks from behind a podium*.

Billings: If you want to follow along with me, we'll begin on page “i” of the introduction. (*The Firm*)

- (51) *Audience*: We want to follow along with you.

Billings: We'll begin on page “i” of the introduction.

次は条件節に予測の意味の will が現れている例である¹⁰⁾。

- (52) *Rick*: I was born in New York City if that'll help you any. (*Casablanca*)

- (53) A: It will help me if you tell me where you were born.

Rick: I was born in New York City.

次の2つは、帰結節が疑問文の例と命令文の例である。

- (54) a. *Al*: ... You know why we've been doing it [= the sketch] the same way for forty-three years? Because it's good.

Willie: And you know why we don't do it any more? Because we've been doing it the same way for forty-three years.

Al: So if we're not doing it any more, why are we changing it? N. Simon *The Sunshine Boys*

- b. *Willie*: We're not doing it any more.

Al: Why are we changing it?

- (55) a. If it won't spoil your supper, come on down for a cup of tea. R. Anderson *Tea and Sympathy*

- b. *Tom*: It won't spoil my supper if I have a cup of tea.

Debora: (Why don't you) Come on down [for a cup of tea].

先に見た (18) の例でも、条件節と帰結節の関係を対

話形式として捉えることができる。

(56) A: Women are afraid of being left out by not knowing what is going on with this person or that.

B: Men are afraid of being left out by not knowing what is going on in the world.

(iii) 類の条件文は、こうした対話の関係を条件節と帰結節との関係として表したものと言える。例えば、

(46) の例では、次のようにメタ表示の条件節と帰結節として表される¹¹⁾。

(57) a. Deborah Kerr: If it is true [you're looking for the captain], I say [he isn't here].

b. If it is true [you're so smart], I ask you [what the date of Charlemagne's coronation was].

c. If it is true [you've finished your homework], I tell [you to go out and play].

(ii) 類の条件文の場合、条件文全体は、実行される発話行為が礼儀作法にかなうものであることを述べたもの考えられる。これに対し、(iii) 類の条件文は、条件節と帰結節とを合わせて、全体として行為の実行を結論とする実践推論 (practical inference) を表していると考えられる。実践的推論とは、黒田 (1992: 36) の例を借りると、次のような推論である。

実践的推論

大前提 ・乾燥した食物はすべての人間が食べるべきものである。

小前提 ・これは乾燥した食物であり、私は人間である。

結論 ・私がこれを食べる。(行為)

この例から分かるように、実践的推論は、論理的推論と異なり、結論の部分が命題ではなく、行為の実行になる。そうした行為の実行は、身体的動作ではなく、発話行為であっても良い。例えば、次のような対話について考えてみたい。

(58) Burt: I'm looking for the captain. = (47a)

Debora: He's not here.

この場合、Debora の発話行為は、次のように、暗に想定される大前提と Burt の発話を小前提とする結論と考えることができる。

大前提: If anyone looks for X, tell him where X is.

小前提: Burt is looking for the captain.

結論: Debora says that he is not here. (Speech Act)

(iii) 類の条件文は、小前提を条件節に、結論を帰結節に入れたもので、帰結節で遂行される発話行為が、暗に想定されている大前提と条件節の表す小前提とによって正当化されていることを表していると言える¹²⁾。

(59) Burt: I'm looking for the captain.

Debora: If you are looking for him, he's not here. ここで Debora は、前提をふまえて結論の発話行為を遂行するという実践的推理を行い、その推理をもとに、条件節には小前提を、帰結節には結論の発話行為を入れた条件文を主張している。これは、言い換えると、小前提を想定する行為、結論を遂行する行為、条件文を主張する行為の3つの行為を同時に行っていることになる。この3つの行為の関係は次のように示すことができる。

(60) $u''=I (= \text{Burt}) \text{ say [I'm looking for the captain].}$

↓

$u'''=I (\text{If } [I \text{ it is true } [\text{you are looking for him}]], [I \text{ say } [\text{he is not here}]])$

↑

$u'=I \text{ assume [it is true}$

$[\text{you are looking for him}]].$

↑

$u=I \text{ say [he is not here].}$

ここで、条件節は小前提を想定する行為のタイプを取り込んでおり、それは Burt の発話をエコーしているので、Burt の発話はそのタイプのトークンになっている。結論の発話行為は、(ii) 類の場合と同じく、行為を遂行すると同時に帰結節にタイプを供給するという2重の役割を果たしている。

最後に補足的に付け加えると、(46) の例では、相手の発話内容が真である (it is true ...) という知識に基づいて、結論の行為を実行していると考えられるが、(18) の例では、相手の発言行為そのものに対抗して、結論の行為を実行していると考えられる。

(61) If [you say [women are afraid of being left out by not knowing what is going on with this person or that]], [I say [men are afraid of being left out by not knowing what is going on in the world]].

さらに、帰結節の主張行為が話し手個人の行為としてではなく、一般的な行為として解釈される場合には、より一般的な発話行為のタイプがメタ表示されていると考えることができる。

(62) If [x says [women are afraid of being left out by not knowing what is going on with this person or that]], [y says [men are afraid of being left out by not knowing what is going on in the world]].

4. まとめ

本稿では、まず発話行為条件文を発話の力の掛かり方をもとに次の3つ分類した。(Fは発話の力で、 \vdash , $?$, $!$ のいずれか。xはI, you, (s)he.)

(63) i-類: $F(P \rightarrow [x \text{ says } Q])$

ii-類: $\vdash (P \rightarrow [FQ])$

iii-類: $\vdash ([\vdash P] \rightarrow [FQ])$

そして、それぞれ [] で示した部分がメタ表示になっており、そのメタ表示は、発話のトークンでもってそのタイプを指示するという引用における言葉使用と同じ働きによることを示した。

注

1) (9a), (10a), (11a) は、いずれも Sweetser (1990: 118) の例。

2) (5) や (6) の例では、帰結節に then が現れているが、(ii) の種類の条件文では、通例 then は用いられない (Horn (1989: 380), Geis and Lycan (2001: 186), Declerck and Reed (2001: 364))。

i. If I may speak for myself, (*then) I don't think it's a good idea. Declerck and Reed (2001: 364)

ii. *If you want them, then there are biscuits on the sideboard. Geis and Lycan (2001: 186)

また、(8) と対比させると (9b) は次のようになる。

iii. I say that, if I may say so, I say that's a crazy idea.

(i), (ii) の主節が遂行文の例もこのような構造をしている。

3) この点について、Recanati (2010: 221) は次のように述べている：

When words are mentioned, however, the *medium* itself is brought to the forefront of attention: the words are displayed, exhibited. This is a form of ostension, as Davidson and others pointed out, but it differs from ordinary ostension in one respect: the ostended token does not exist independently of the act of ostending it. When I point to a bird, the bird exists independent of my pointing, but when I mention a word, the ostended token is produced—it comes into being—through the very act of ostensive display.

4) 小文字はトークンを、大文字はタイプを表す。‘↑’ は、‘u is a token of type U’ という関係を表す。

5) ‘ \Rightarrow ’ は、‘A is a subtype of B’ という関係を表す。U’ is a subtype of U (U’ \Rightarrow U) iff: For any token u, if u is of type U’, then u is of type U.

6) (ii) 類の条件文では、帰結節の発話行為は条件付きで遂行されるのではなく、実際に遂行されているとする考え方については、Sweetser (1991: 118), Dancygier (1998: 89-90), Geis and Lycan (2001: 190) などを参照のこと。

7) Barwise and Perry (1989: 164-5) は、いわゆる遂行分析 (performative analysis) を ‘fallacy of misplaced information’ の例であると、次のように説明している。

The temptation to think that all the information available from an utterance must be part of its interpretation we call the *fallacy of misplaced information*. We think that what is called the performative analysis (where a sentence like JACKIE IS BARKING is assumed to have some sort of “deep structure” of the form I TELL YOU THAT JACKIE IS BARKING) is a typical case of the fallacy of misplaced information, an attempt to put part of the information about the discourse situation into the described situation.

この説明に合わせると、(ii) の種類の帰結節は、発話状況の情報を別の発話の記述状況に組み入れる働きをしているとすることができる。

8) ちなみに、Greenbaum (1969: 82-4) は、(41a) を次のようにパラフレーズしている。

If I may say confidentially [I would say (that)] she is very stupid.

9) 発話行為修飾副詞を持つ文の分析は、直接話法の構文になぞらえて分析するのが無理がないように思われる。例えば、(41a) は次のように分析できる。

i. I tell you confidentially, “She is very stupid.”

この場合、引用符の中の発話は、主張行為を遂行すると同時に、発話行為のタイプを先行する伝達部の発話に供給する働きをする。

ii. I tell you confidentially,

“[I say that she is very stupid]”

↑

I say that she is very stupid.

10) Declerck and Reed (2001: 82-3) は、条件節に予測を表す will は埋め込まれた条件文の帰結節であると述べている。

i. If (as you say) *it* will help you <if I lend you ten pounds>, I am willing to lend you £10.

11) Hare (1971: 89-93) は、(主張の) 発話行為を ‘tropic’ と ‘neustic’ の2つの働きに分けて考えた。Lyons (1977: 750) はこの考え方を受けて、前者を ‘it is so’, 後者を ‘I say so’ と表している。(46) のような例では、エコーされているのは ‘tropic’ の部分だけと考えられるので、それを ‘it is true’ で表している。

一方、2つの発話を対比させる (18) の例や次のような例では、エコーされるのは ‘neustic’ までを含めた働きと考えられる。

i. All I propose is that we should be kind to this poor girl. We must help her to prepare and fit herself for her new station in life. If I did not express myself clearly it was because I did not wish to hurt her delicacy, or yours. B. Shaw *Pygmalion*

ii. A: You did not express yourself clearly.

B: It was because I did not wish to hurt her delicacy, or yours.

iii. If you say [I did not express myself clearly, I say [it

was because I did not wish to hurt her delicacy, or yours].

- 12) 久野 (1973: 104-5) は、日本語のナラ条件文の主節は「決意」, 「意志」を表すものでなければならいと言っている。
- i. a. 太郎がくるなら、私は帰ります。[意志]
 b. *太郎がくるなら、花子が帰ります。[単純未来]
- ii. a. 寒くなるなら、暖房を入れます。[意志]
 b. *寒くなるなら、暖房が入ります。[事実の単純陳述]
- こうした事実は、ナラ条件文が実践的推論を表すということの説明が付く。

参考文献

- Barwise, J. and J. Perry (1983) *Situations and Attitudes*, Stanford: CSLI Publications.
- Clark, H. H. (1996) *Using Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. and R. J. Gerrig (1990) "Quotations as Demonstrations," *Language* Vol. 66, No. 4, 764-805.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge and Causation in Conditional Constructions*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Davidson, D. (1979) "Quotation," in D. Davidson (2001) *Inquiries into Truth and Interpretation, 2nd edn.* Oxford: Oxford University Press, 79-92.
- Declerck, Renaat and Susan Reed (2001) *Conditionals: A Comprehensive Empirical Analysis*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Geis, Michael L. and William G. Lycan (2001) "Nonconditional Conditionals," in Lycan (2001) *Real Conditionals*, Oxford: Oxford University Press, 184-205.
- Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*, London: Longman Ltd.
- Haegeman, L. M. V. (1983) *The Semantics of Will in Present-day British English: A Unified Account*, Brussel: Paleis der Academiën.
- Hare, R. M. (1971) *Practical Inferences*, London: The Macmillan Press LTD.
- Ifantidou-Trouki, Elly (1993a) "Sentential Adverbs and Relevance," *Lingua* 90, 69-90.
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』東京：大修館
- 黒田 亘 (1992) 『行為と規範』東京：勁草書房
- Lyons, J. (1977) *Semantics*, Vol. 2, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mittwoch, Anita (1977) "How to Refer to One's Own Words: Speech-act Modifying Adverbials and the Performative Analysis," *Journal of Linguistics* 13, 177-189.
- Noh, Eun-Ju (2000) *Metarepresentation*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Nunberg, G. (1978) *The Pragmatics of Reference*, Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Quine, W. V. (1969) *Ontological Relativity and Other Essays*, New York: Columbia University Press.
- Recanati, F. (2010) *Truth-Conditional Pragmatics*, Oxford: Clarendon Press.
- Sperber, Dan (2000) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, Dan and D. Wilson (1981) "Irony and the Use-Mention Distinction," in P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press, pp. 295-318.
- Sweetser, Eve E. (1982) "Root and Epistemic Modals: Causality in Two Worlds," *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Vol. 8 (1982), 484-507.
- _____ (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural aspects of Semantic Structure*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tedeschi, P. J. (1974) "Some Aspects of Conditional Sentence Pragmatics," in R. W. Fasold and R. W. Shuy (eds.) *Studies in Language Variation*, Washington, D. C.: Georgetown University Press, pp. 136-151.
- Van der Auwera, J. (1985) *Language and Logic: A Seculative and Condition-Theoretic Study*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- _____ (1986) "Conditionals and Speech Acts," in E. C. Traugott et al (eds.) *On Conditionals*, pp. 197-214.
- Wilson, Deirdre (2000) "Metarepresentation in Linguistic Communication," in D. Sperber (2000), pp. 411-448.
- (本稿は、2013年12月に開かれた日本語用論学会第16回大会ワークショップでの発表原稿に修正を加えたものである。)